



—萩原さんは、どうして写真をはじめたんですか？

私は鉄道少年だったんですよ。住んでいたのが高崎で。高崎って鉄道の町じゃないですか。

—蒸気機関車ですか？

そうです。子どものときから踏切でずっと見ていました。その延長でカメラに興味をもって、鉄道写真を撮り出した。

—いつ頃からですか？

もう、中学生のときから。1975年3月に兄といっしょに北海道に最後のSLを撮りに行って、そのときに夕張に行っているんですよ。夕張鉄道が廃止になった次の日。まだ炭鉱がね……ちょっと下火にはなっていましたけど。

—中学生で北海道まで行くと相当ですよ。

兄と二人で行きました。その後も、鉄道が好きだったから、高校生になっても今度は友だちと

いろいろところへ行きましたよ。広島とかね。

—夏休みに行ったんですか？

夏休みというか……土日は家にいなかった。カメラ持ってずっと出かけていました。当時は夜行列車が高崎を朝4時頃から出るんですよ。それで東海道とか東北に行って、夜になって帰ってくる。

—すごい行動力ですね。

そこで写真に興味をもって、大学は、日大芸術学部写真学科に行きたいと思ったんです。

—大学に行く前から写真家じゃないですか。

そうしたらレベルが違ったんですよ。作家をみぎす人もいて、高校時代からコンテストで賞を取って、地元では名が知れている。こんなすごい人たちもいるんだと思って。同級生には、現在も東京都写真美術館で学芸員として活躍されている鈴木佳子さんがいました。彼女のように大学で写真をはじめた人や、私みたいな趣味の延長の人もいて、最初は少し差がありましたが、大学で1年間も写真の基礎を学んだら、次第に追いついていきました。私は1年の春から夕張に行きましたから。

夕張炭鉱の犠牲者の搬出を見て、これは一生撮らなきゃいけないと思った

—北炭(北海道炭礦汽船)夕張新炭鉱のガス突出事故があったのは？

浪人して入学した1年生の1981年10月16日。炭鉱事故の報道を見て、以前訪れた夕張だって。

—夕張に行った記憶があって反応したんですね。

年は同じだけど1学年上の先輩と、じゃあ夕張行こうかって。そこで残されていた犠牲者の搬出を見た。それから、これは一生撮らなきゃいけない、という感じではじまったんですね。

—大学生が行って撮れるものなんですか？

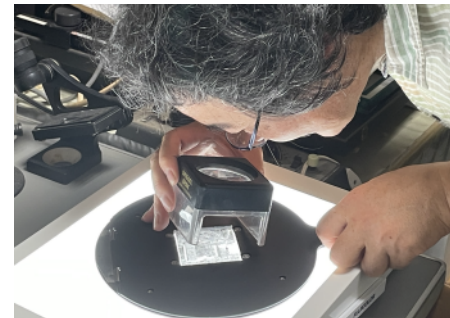
あの時代は簡単に撮れたというか。まず炭鉱に許可をとりに行ったら、おお君は日大か、おれも日大なんだって……事務の人がね。

—日大派閥はすごいですね。

報道陣もいっぱいいて、フリーだろうが学生だろうが関係なかったですよ。学生特権で、炭鉱マンと仲良くなると、飯食いに来いよって。それで、たらふくジギスカン。撮った写真は後日、キャビネくらいにプリントして持って行ってあげるんです。それでまたつながりができるじゃないですか。そういうかたちで入っていきましたね。

—そのときから写真家になることを考えていた。

いやあ……写真家という感じじゃなかった。何しろ撮るのが必死だった。ただ新聞記者と接するので、そこから報道に興味を持ちましたけどね。夕張へ行ってないと今の人生はないですね。



—1980年代の炭鉱はどんな感じだったんですか？

ビルド鉱と言われる近代的な炭鉱は残っていたんです。九州は三井三池、離島なら池島、高島炭鉱も残っていました。北海道は北炭関係。夕張を中心に幌内、空知、釧路の太平洋炭礦。三井・三菱美唄は閉山していましたが、三井芦別や住友赤平は残っていました。私も最初は炭鉱イコール土門拳さんで『筑豊のこどもたち』を見ましたが、夕張とは違う。筑豊は小ヤマが多いでしょ。北海道は大手だから意外と裕福だった。筑豊も三井田川とかは全然違いますよ。

—大学を出てすぐ毎日新聞社に入ったんですか？

就職浪人をして、私は毎日新聞を3回受けました。大学も浪人、就職も浪人。

—豊かな人生を歩んで来られた。

いやあ、とんでもない。1985年に卒業した後、5月に三菱南大夕張炭鉱でガス爆発事故が起きたんです。それで合同葬のときに、お金を何とかして夕張へ、あの事故はひとりで撮りに行きました。

—まわりに炭鉱を撮っている人はいたんですか？

撮影していて夕張でお会いしたのは、原発を撮っていた樋口健二さん。あとフリーが何人かいましたが、結局、残っているのは私ぐらいです。

—遅れて来た感じでしょうか。

ニコンサロンで写真展をしたときに桑原史成さんが見に来てくれて、60年代の亡霊だねって。そんなイメージですよ。でも60年代の炭鉱と80年代は全然違う。コンピューターで近代化されたけど事故が起きるといのが違う。



SNOWY 1 本岐炭鉱ズリ山 北海道白糠町
2009年 350×332mm 漆額



SNOWY 2 夕張炭鉱大新坑 北海道夕張市
2012年 350×332mm 漆額



SNOWY 3 日本特殊鋼管大湊工場 青森県むつ市
2010年 350×332mm 漆額

本橋成一さんの写真に惹かれていた 余韻が続く感じがありましたね

一本橋成一さんともお会いしていた。

1982年11月に大学の文化祭があって、先輩2人と夕張の写真展をやったんです。当時は雑誌に写真家の住所が載っていたので、本橋成一さんに案内を出したら見に来てくれて。そのあと東中野の本橋さんの家に行ったら、上野英信さんの『写真万葉録・筑豊』の編集をしていた。

—1984年から全10巻の刊行がはじまる前ですね。

本橋さんの机の上にバーっと筑豊の写真があった記憶がありますよ。もちろん土門さんは好きですが、やっぱり本橋さんの写真にすごく惹かれていたんですね。いまでも好きですけど。

—それはなぜですか？

いやあ……動きがあるんですね。余韻が残るっていうか。写真一枚じゃなくて、何枚も見ていると深く脳裏に残る気がしません？

—後々、映画を撮る人ですしね。

やっぱりあの人は映像感覚なんですよ。私なんかだと、このシーンを一発で決める、みたいなのがあるじゃないですか。本橋さんはそうじゃない。余韻が続く感じがありましたね。本橋さんの『炭鉱〈ヤマ〉』っていう写真集を古本屋で探して、まあ、手に入れるんですけど、その前に、ひとつ上の先輩が、日野の図書館にあったとか言って、借りてきて見て、おお、すげーって、そんな感じでしたね。

—炭鉱を撮る写真家の影響は受けましたか？

炭鉱の写真は、土門さん、本橋さん……桑原さんも水俣の前に筑豊へ行っているんですね。桑原さんから聞いたんですけど、土門さんの『筑豊のこどもたち』で表紙になったるみえちゃんを撮っているんですよ。そうしたら土門さんの写真集が出たから封印したって。何十年か後にニコンサロンで筑豊の写真展やったときに観ましたけど、良い写真だったですね。あとはいわき出身の鈴木清さん。あの独特な表現に惹かれました。



SNOWY 4 松尾鉱山 岩手県八幡平市
2005年 508×406mm

—その頃から炭鉱に絞って撮っていたんですか？

炭鉱しか撮っていなかったです。

—鉄道は撮っていなかったんですか？

まだ国鉄時代には、ときどき撮りました。

—民営化の直前ですね。

古い機関車が残っていて、ローカル線も良かったですから。JRになってからほぼ止めました。夕張に行ってから、炭鉱。20歳のときに人間の死の光景を見ちゃうとね。凄いショックでもあるし……間違いなく人生を変えましたね。

—新聞社の仕事として報道写真を撮りながら、空いている時間に自分の写真を撮っていた。

新聞社ではカメラは35mmを使いますが、休みの日は自分の作品を撮ろうと思ったので、6×6のフォーマットに変えたのが転機になりました。

—仕事と切り替えるためですか。

そうです。もちろん何かが起きたら撮らなきゃいけませんから35mmも持っていますよ。新聞社が忙しいと言っても夏休みも冬休みもあって、そのときに北海道へ行くわけですよ。それでいろんな炭鉱を撮り尽くしたら、炭鉱と東北の鉱山は密着した関係がありますから、今度は鉱山に行って、どんどん広がって西日本に向かいました。



SNOWY 5 松尾鉱山 岩手県八幡平市
2005年 508×406mm

—転勤も関係がありましたか。

転勤は大きかったですね。1994年から96年まで九州にいたんですけど、まだ三池は生きてたし、池島も生きてました。筑豊もまだまだ炭住がいっぱいありました。

—そのときに筑豊文庫も撮っているんですね。

そう。筑豊文庫の上野晴子さんのところに行くとお昼が用意されていて、どうせ食べてないでしょって言われて、はいって……

—上野英信は亡くなった後ですね。

英信さんはニコンサロンの写真展を観に来てくれて、中野の寿司屋に連れて行ってもらった。その寿司屋の主人が筑豊出身で、炭坑節を歌っていたのは覚えていますね。

—上野英信の影響も受けていましたか？

大学に入ってから、そんなにドキュメンタリーに興味があるわけじゃなかったんですけど、炭鉱に興味をもつようになって、本を読まなかった人間が、ガンガン読むようになって。

—岩波新書の『地の底の笑い話』とか。

はい。『追われゆく坑夫たち』、『地の底の笑い話』とか……どンドン読んで知識になりましたよ。だから自分でコツコツやるしかないですね。



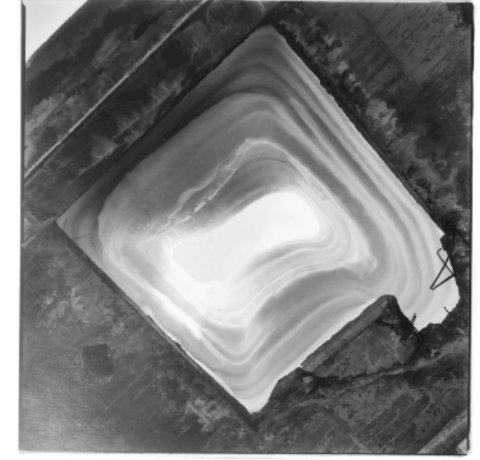
SNOWY 6 手稲鉱山 北海道札幌市
2000年 1700×1100mm ロール



SNOWY 8 神岡鉱山 岐阜県飛騨市
2004年 1700×1100mm ロール



SNOWY 9 松尾鉱山 岩手県八幡平市
2005年 1700×1100mm ロール



SNOWY 10 羽幌炭鉱 北海道羽幌町
1993年 400×400mm アクリル板

基本的にドキュメンタリーがベース ただ表現方法が違う

—「SNOWY」の発表は新聞社時代からですか？

1983年にニコンサロンで夕張の写真展やっています。そのあとは発表してなくて。ただ、九州にいたときに、九州大学の石炭研究資料センターに出入りして資料展示の手伝いをして、自分の写真作品もそこに入れましたね。当時、炭鉱はマスコミって言うと警戒するので、九州大学の学外研究員として写真を撮っていました。会社でも戦後50年に「古い写真と今」という企画を出して、製鉄所や炭鉱のネガをたくさん見ました。長崎の浦上天堂の取り壊しの写真もありましたよ。

—最初の写真集『巨幹残栄』は写真の説明が書かれていて、『SNOWY』とは印象が違いますね。

『巨幹残影』はドキュメンタリー。よく見ると『SNOWY』に近づいている写真もあるんですよ。私の場合は資料をいっぱい見て、基本的にドキュメンタリーがベースになるんです。ただ、表現方法ですよ。『巨幹残栄』は短いキャプションをつけようということだったので、全部つけましたけど。そうするとドキュメンタリーになりますよね。

—『SNOWY』は、ドキュメンタリーの部分が見えないようにしていますよね。

何か書いちゃうと、ああ炭鉱かってなるんで、あえてそういうことをせずに。まあ場所は炭鉱とか鉱山ですけど、そこが冬になるとこういうかたちになりますよ、と撮ったんです。『巨幹残栄』はサブタイトルが「忘れられた日本の廃鉱」でしょ。宮本常一さんの『忘れられた日本人』から出版社がとったんです。それで佐野真一さんに文章を依頼して。一宮本常一の文章を引いていましたね。

—そこなんですよ。あれは結構良くできている本で。まあ、たいへんだったんですけどね。

—たいへんだったとは？

写真はあるので、九大や夕張に行ってもう一回資料を調べて。撮ったときは覚えてはいますが、確信的なものはないから、裏取りをして。

—それから『SNOWY』へ変化していった？

『SNOWY』も並行して撮っているんです。最初に夕張に行ったのが3月の末で、夕張は雪が多いんですよ。煤で汚れた雪でもイメージは白じゃないですか。炭鉱マンの黒と対照的というか。私は筑豊に行っていないので、冬の夕張が炭鉱のイメージになった。雪っていうのは強烈なんですよ。

—炭鉱のイメージと雪は結びつかないですよ。

もちろん筑豊も雪は降ります。白いポタ山の写真を見たことがあります、北海道とは寒さが違います。そのなかで労働しているんです。一突然『SNOWY』に切り替わったのではなく。

『SNOWY』ってタイトルはつけていませんけど、冬も撮っていました。それと、80年代後半は炭鉱以外のテーマを探して東北方面ににかけているんですよ。それで90年に下北へ行ったんですが、大寒の頃ですごく寒くて、地吹雪が舞い、写真なんか撮れる状態じゃないと思っていたときに、コンクリートの建物が見た。その建物の中に入ったら、壁まで雪が付いた冷凍庫状態で、ああきれいだなと思って、夢中で撮ったんです。

—炭鉱の施設だったんですか？

鉱山関係かもしれないと思ったけどわからなくて、帰って調べたら、砂鉄の精錬工場だった。それも戦時中のもの。下北半島は鉄が採れたからね。宮本常一さんも同じ建物を撮っているんですよ。結局、そのときの下北の風景を見て、やはり鉱山かと思って、まずは冬の夕張を中心に撮り、『SNOWY』の土台ができていきます。本格的に撮ったのは2000年頃だと思います。

—もう人のいない炭鉱町……

あと鉱山もですね。並行して撮っているんです。『巨幹残栄』は2004年に写真集が出ますが、次は雪のヴァージョンだと思って自分で用意していたんです。学生のときから撮っていた夕張の写真がありますが、それを飛び越えて『巨幹残栄』を出版したわけです。土門さんの『筑豊のこどもたち』や本橋さんの『炭鉱』など名作が数多くありますから、それらと違った独自に表現した炭鉱や鉱山の方がいいのかなと思って、眠らせてたんです。ただ長く撮っていますから、40年経ちますけど、いま見ると貴重な写真ばかりですよ。

—『SNOWY』は、炭鉱とはわからないですね。きれいすぎるとは言われませんでしたか。

言われましたね。それは違うと思いました。人の記憶は薄れていきますが、少しでも留めさせる表現があるのではないのでしょうか。炭鉱跡にまだこんな景色が残っている、冬になるとこのような状態になるというところから、記憶をよみがえらすことができるのではないかと思いましたけど。

—発表して手応えはありましたか？

2001年に横浜で発表したら、意外と面白がってくれましたね。これで行けると思ったんですけど、

『巨幹残栄』を何とかしなくちゃいけない。そっちを中心に撮ってきましたからね。窓社の西山俊一さんが本にしてくれました。その頃は廃墟ブームで、2004年1月に窓社の最初の出版物として写真集が出るんですけど、そのあとに雑賀雄二さんの『軍艦島』も復刊されたり、小林伸一郎さんも2月のはじめに出版されました。1、2週間早く出るのが大きくて、新聞の書評にバンバン出たんです。

—早く出せて良かったですね。

—そう(笑)。朝日新聞の書評は山下裕二さんが書きました。山下さんが書評を書くために本屋に行った時『巨幹残栄』の表紙が目にとまったようです。このおかげもあり増刷になりました。

廃墟写真とは言われたくない 人の気持ちは残っているじゃないですか

—廃墟という言葉は好きじゃないんですね。

—嫌いですね。もちろん朽ちていきますけど、人の気持ちは残っているじゃないですか。

—廃墟を撮っているわけではないと。

—廃墟写真と言われて、現実はそのんだけど、そう思いたくないよねって。そこに住んでいた人からすれば……特に小学校なんかそうじゃないですか。幽霊が出るとか言われたくないですよ。自分の母校ですよ。そういうのは嫌だなと思って。だから6×6で丁寧に撮る。そうしないと申し訳ない。『SNOWY』は、特に美しく撮ろうと思いましたね。

—6×6で撮ったのはなぜですか？

—縦も横もない四角いなかに、どう構成するのがいいのかなと思いましたね。最初に6×6を買ったときはスナップを撮ろうと思っていて、須田一政さんの6×6の写真がすごく良かったので憧れていました。でも、だんだん違う方向に行ってしまった。何度か違うテーマを撮ろうと思ったんですが、結局、炭鉱の方に戻ってしまったのは事実ですね。やっぱり、若いときの夕張で経験したことが……—夕張で人生が変わったんですね。

—そう。いろいろな人にお世話になって。夕張の炭鉱画家の畠山哲雄さんにもお世話になりました。畠山さんは特に冬の絵がいいんです。『SNOWY』はその影響もあると思いますね。

—2009年に目黒区美術館で「文化資源としての〈炭鉱〉」展があって、萩原さんも出品されました。

—まあ、スケールが大きかったですよね。ここまで全部集めるかって。

—美術館に入りきれなかったですからね(笑)

—そう(笑)。その前に、いわき市立美術館で杉浦友治さんが炭鉱展を企画しているんですよ。

—2004年の「炭鉱(ヤマ)へのまなざし—常磐炭田と美術—」ですね。

—『巨幹残栄』が出たときに、写真展を杉浦さんが観に来てくれて、それがすごく大きかったです。目黒区美術館は、それを全国区に広げたので。

—炭鉱の展覧会は、いわきがきっかけだった。

—それも美術でね。写真があり、彫刻があり、もちろん絵画や版画もあり。いわきは明治時代の古写真まで出ましたね。常磐のいい写真がありました。だから、いわきに参加できたのが大きくて。それで2009年の目黒区美術館があったんですけど、担当学芸員から言われたのは、君ほどの産炭地に行っても、誰か写真撮っている人はいないかと聞くと、かならず名前が出てくるって。九州に電話をかけると、上野朱さんがいるじゃないですか。常磐なら杉浦さんとか、夕張の美術館でも私の名前が出て(笑)。いったい君は何者なんだって。

—それが担当学芸員との初対面だったんですか？

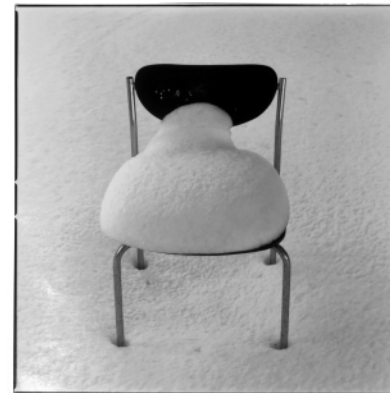
—そうです。来いって言われて(笑)。畠山さんと本橋さんの作品はあるし、鈴木清さんや奈良原一高さんもあって、参加できて光栄でしたね。

—画家の野見山暁二さんも亡くなりましたね。

—そう、あのとき野見山さんにも会った。展覧会のオープニングで私がいちばん若かったんですよ。

—まあ、そうですね。

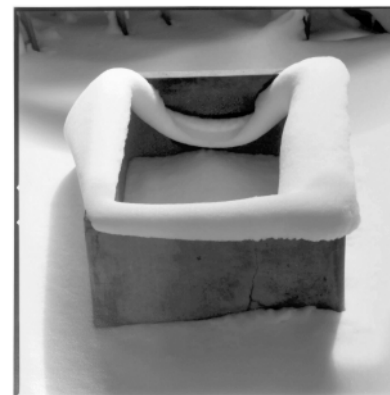
—だから、これは最後まで看取らなきゃいけないんだな、この石炭産業を、と思いましたね。



SNOWY 11 松尾鉦山 岩手県八幡平市
2004年 355×279mm



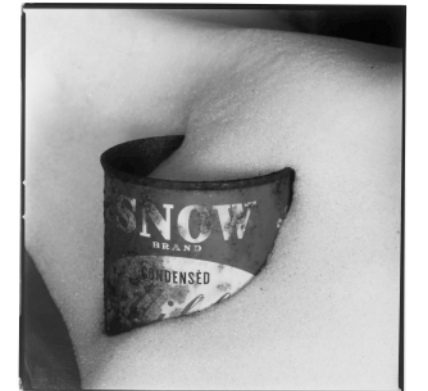
SNOWY 12 松尾鉦山 岩手県八幡平市
2005年 355×279mm



SNOWY 13 松尾鉦山 岩手県八幡平市
2010年 355×279mm



SNOWY 14 雄別炭鉱 北海道釧路市
2003年 355×279mm



SNOWY 15 松尾鉦山 岩手県八幡平市
2005年 355×279mm



SNOWY 16 松尾鉦山 岩手県八幡平市
2010年 355×279mm

一責任ですわね……なるほど。

そのなかに写真家の佐藤時啓さんもいらっ
しゃって、知り合うわけですよ。もちろん、佐藤さん
の作品は私知っていましたけど。いっしょの場で展
示できて、非常に嬉しかったですね。

一伝説的な展覧会になりましたからね。

できないでしょう。もう、あんなことは。

一許されない(笑)。

あの人しかできない。

一許されたのかって問題もありますけど(笑)。

結果として、あれだけの人を集めて、あんなとん
でもない図録をつくって。しんどかったけど、楽し
かったですね。

一熱がすごく伝わってきましたよね。

2009年って、ちょうど私は『にっぽん木造駅舎の
旅100選』の本の取材もやっていたんですよ。それ
に冬青社でも写真展を頼まれて、3つ重なって
いて、すごくしんどかったんですけど。

一若い頃から木造駅舎も回っていたんですよ。

夕張で知り合ったNHKの小島伸夫さんが、木
造駅舎の番組を制作するんだけど調べてと言わ
れて。ああいいですよって言ったら、本もつくるか
らって言われてまして。

一そしてベストセラー本が出た(笑)。

いやいやいや……私の手もとにはもう、ヤフー
オークションで買った1冊しかなくて(笑)。それが
あり全国の撮影はもちろん原稿も書かなければな
らなくて、本当に忙しい年でしたね。ただ、亡くな
った福田文昭さんがね、それがチャンスだよって。い
まがんばれば絶対いいことあるよって言って、次
の年に東川賞になるわけですよ。

一2010年の東川賞特別作家賞ですね。雑誌『エル
メスの世界』で紹介されたのもその頃でしたか。

そのあと、2013年ですね。

一すごいですね、世界進出も。

いや、だから本当に原点は学生のときの夕張に
行って、そのあとずっと続けていたことが大きい。

一それが重要なんですね。

不器用だからいいんじゃないですか
こっちは細いけど、深いよって

いま学生にも言うんですけど、続けること。卒業
制作で終わっちゃだめだよって。だけど多くはな
かなか続かないですよ。

一続けるのは簡単なことではないですよ。

休んでもいいけど、撮りなくなったら撮れよっ
て。卒業して数年はしんどいんですけどね。だけど撮
りたくなるし、続けていれば私のような例があるん
だから。特にいまは、いろいろ発信できるし。

一逆に発信が多すぎて埋没することもありますよ
ね。そのなかで一貫して自分のテーマを見定めて
……でも、定点観測って本当にしんどいですよ。

私は器用な人間ではないので。正木さんには、
君は何でもできるねって言われましたけどね。報
道系の写真と美術系の写真を撮り分けられるって
……あ、担当学芸員の名前を出してしまった。

一いいんじゃないですか。敬意を表して。目黒区美
術館の担当学芸員は正木基さん。でも萩原さんは
器用ではないんですか？

不器用ですよ。写真に関しては、そういうことは
できるけど。不器用だからいいんじゃないですか。
器用だったら次から次へとテーマを見つけて、広
く浅くでしょ。こっちは細いけど、深いよって。ずつ
とやっている、変わった人間がいるって……

一みんな、わかるんですよ。他の人はやらないか
ら(笑)。炭鉱の話なら萩原さんに聞け、と。

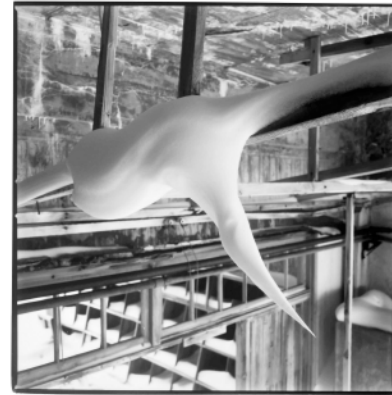
だから、ある程度のところで自分のものを決め
たら徹底的にやる。木が育つと枝分かれするじゃ
ないですか。そうなればいいと思います。炭鉱と
か鉱山をやれば戦争にもつながるわけですよ。

一鉄道だって炭鉱とつながるわけですよ。

全部つながってくるんですよ。撮りはじめた頃
には、まだ撮ってるの、とかすごく言われましたけど。
桑原史成さんじゃないですけど、学生が撮るテー
マじゃないよね、と。昔の学生は撮っていたかもし
れないけど。でも見方が違うわけですよ。



SNOWY 17 松尾鉱山 岩手県八幡平市
2011年 355×279mm



SNOWY 18 松尾鉱山 岩手県八幡平市
2011年 355×279mm



SNOWY 19 清水沢電力所 北海道夕張市
2014年 355×279mm



SNOWY 20 羽幌炭鉱 北海道羽幌町
2012年 355×279mm



SNOWY 21 羽幌炭鉱 北海道羽幌町
2012年 355×279mm



SNOWY 22 手稲鉱山 北海道札幌市
2000年 1700×1100mm
ロール



SNOWY 23 手稲鉱山 北海道札幌市
2000年 1700×1100mm ロール

一時代遅れのようにも、時差があって初めて見えてくるものってあるじゃないですか。50年代と80年代の視点は違うし、80年代に撮る人がいないんだら、やった方がいいですよ。

実際、90年代終わりには廃墟ブームが起きるんですよ。最初は廃線ブームですけど、鉄道の先には炭鉱や鉱山があって。産業がなくなったから鉄道が廃線になったわけで。

一ひとつのことを続けて広がる世界を大事にした方がいいし、そのときは古く見えても、時代が変わるとまわりの見方も変わりますよね。

変わったんですよ。それと、みんな続けないから私が残っちゃうんですよ。

一とはいえ、そういうテーマにめぐり合うかどうかも大事なことで、萩原さんは夕張と出会った。

私の場合は全部回り道なので、打たれ強いですよ。まあ結果的には不思議と自分の思い通りになってきているんですけど。

一打たれ強く、粘り強くですね。

それと、理解をして写真を撮っているかどうか大事ですよ。やっぱり自分で見て聞いて。写真は現場に行かなきゃ撮れないですから。意外に文章が間違っていることもあるじゃないですか。

一自分で確認する作業は大事ですね。



SNOWY 24 羽幌炭鉱 北海道羽幌町
2011年 400×400mm アクリル板

新しいものが見えたら、面白いじゃないですか。一そこまで理解を深めるには、膨大な時間と努力が必要ですよ。

それが私にとっては楽しかったんですよ。一よくわかります。他人の情報にアクセスしやすい時代だからこそ、自分で見つけることが大事。現場に行くことよろこびですね。

私だって『SNOWY』や『巨幹残栄』がこんなになるとは思いませんでしたよ。ただ、今まで出ている写真とは違うものをつくろうと思ったし、丁寧に撮ろう、撮らせてもらおうという気持ちですね。そこには生活があるし、事故で亡くなった人もいたし。一そういう存在は、写真そのものには写り込んでいないけれども、奥にあるということですね。

不思議な光景が目の前にあらわれることってありますよね。それは、撮っていいんだな、と。

一それを現場に行って、見つける。

勘もあるけど、経験を積むとだんだんわかってくるんですよ。言葉では言えないけど。突如、光が差して影ができるとか。そうすると面白くて、やめられなくなるんです。

一萩原さんは、その瞬間を撮り続けているんですね。

2023年6月26日、萩原邸にて

聞き手：岡村幸宣



萩原 義弘 はぎわら よしひろ

1961 群馬県高崎市生まれ
1985 日本大学芸術学部写真学科卒業
2007 毎日新聞社出版写真部を経てフリー
現在、日本大学芸術学部写真学科非常勤講師

主な個展

- 2019 「鏝」(ギャラリー冬青/東京・中野)
- 2018 「窓」(Gallery Nayuta/東京・銀座)
- 2015 「ヤマに在りヤマに還る」(釧路市立博物館/北海道釧路市)
- 2013 「黒い屋根・炭鉱住宅の記憶」(ギャラリーコールビット/福島県いわき市)
- 2011 「ヤマに在りヤマへ還る」(アルテピアッツァ美唄ギャラリー/北海道美唄市)
- 2008 「SNOWY」(ギャラリー冬青/東京・中野)
- 2006 「SNOWY」(パストレイズM/A丸ノ内/東京・丸ノ内)
- 2000 「巨幹残栄・東日本編」(コニカプラザ/東京・新宿)
- 1999 「巨幹残栄」ヘルテン国際写真フェスティバル(ドイツ・ヘルテン市)

主なグループ展

- 2010 「第26回写真の町東川賞受賞作家展・SNOWY、夕張定点観測」(北海道東川町)
- 2009 「『文化』資源としての〈炭鉱〉展」(目黒区美術館/東京・目黒)
- 2004 「炭鉱(ヤマ)へのまなざし 常磐炭田と美術」(いわき市立美術館/福島県いわき市)
- 2001 「巨幹残栄・SNOWY」(相模原市民ギャラリー/神奈川県相模原市)
- 1983 「沈黙の炭鉱 夕張は今」(ニコソロン/東京・銀座、北海道夕張市内数会場)

写真集・著作

- 2014 『SNOWY II』 冬青社
- 2009 『にっぽん木造駅舎の旅100選』 平凡社(コロナブックス)
- 2008 『SNOWY』 冬青社
- 2004 『巨幹残栄 忘れられた日本の廃鉱』 窓社

受賞

- 2010 第26回写真の町東川賞特別作家賞
- 2001 第1回さがみはら写真新人奨励賞

コレクション

相模原市、東川町、沖縄県立博物館・美術館、日本大学芸術学部写真学科、夕張市石炭博物館